

## 第4章 学修成果の評価方法の開発

### 1. 看護基礎教育における、全臨地実習に共通したルーブリック導入の取組み報告

淑徳大学 看護栄養学部 小川純子

#### 1.1 はじめに

平成24年、本学では「大学間連携共同教育推進事業」として、関西国際大学や、米国AAC&U (The Association of American Colleges and Universities) での方法を参考にしながら、教室外プログラムにルーブリックを導入するための検討が開始された。看護学科における臨地実習は、大学間連携共同教育推進事業「主体的学びのための教学マネジメントシステムの構築」において、すべての授業科目にルーブリックを導入するという目標が設定されている「教室外プログラム」として位置づけられる。また厚生労働省が、看護教員の質の向上の一つとして作成した「専任教員養成講習会および教務主任養成講習会ガイドライン」(2010年4月1日)において、『実習評価は従来の目標分析による到達度評価ではなく、評価対象者の学ぶ意欲や思考力、判断力などの学習をとおして獲得した能力に着目した評価が必要であり、自己学習力の向上という観点からルーブリック評価を行う必要がある』とも一致している。

看護基礎教育において、学生が看護実践の中に身を置き、看護職者の立場で看護を行うことが出来る臨地実習は、看護実践能力を培うために不可欠である。看護学実習は、基礎看護学実習、領域別看護学実習等、看護学の各専門領域から構成されており、それら全ての実習を経て、学生は、看護師としての知識、技術、態度を習得していく。しかし、実習により担当教員が異なること、それぞれが科目として独立していることなどから、学生が実習での学びや体験の積み重ねを認識しにくい現状がある。また、看護基礎教育をとおして一貫した評価指標がないことから、卒業時の技術・態度面の到達度を評価することが難しい現状がある。そこで、ルーブリックを用いて観点別に進む方向と進み方を段階的に示すことにより、卒業時の到達目標を明確に提示でき、学生が実習を重ねるごとに主体的・系統的に学びを蓄積しやすくなるを考える。

以上を背景として、全領域に共通する要素と求める能力については学科全体で統一し、大学の理念等を反映させた実習のルーブリックの導入を学科全員で検討・開発・活用した過程を報告する。

#### 1.2 本学の臨地実習の目標と構成

臨地実習は、実践の科学である看護学を学習するために不可欠な授業科目であり、1年次から4年次まで段階的に積み上げる内容で構成されている。学生は、全ての臨地実習において、対象となる人の人間性を大切にして尊厳を守り、個人情報を守秘し、安全・安楽に配慮して実習を行うことが求められる。学生は、それぞれの実習前までの講義や演習を通

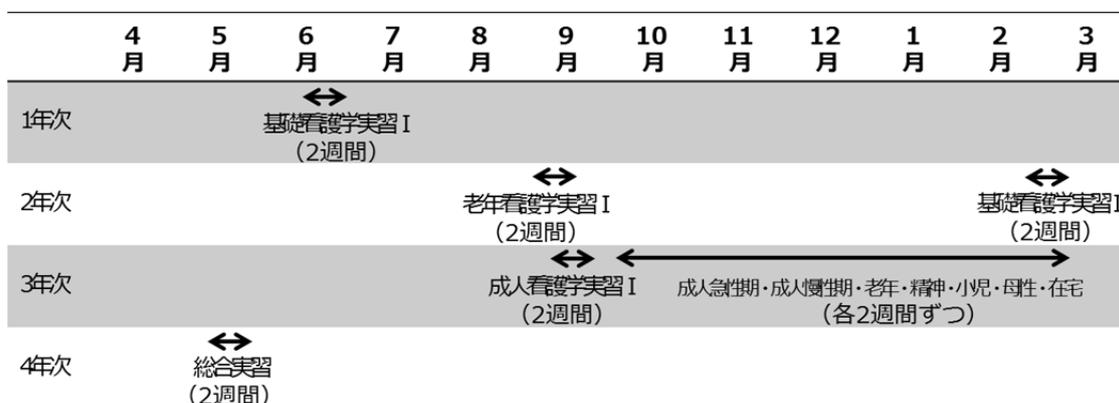
して学んだ知識・技術・態度を統合し、根拠に基づいた看護援助を、対象やその家族と関わりをもちながら実践することで、基本的で総合的な看護実践能力を養う。

臨地実習の目標は、図表4-1-1に示したとおりである。1年次の6月に行う「基礎看護学実習Ⅰ」から始まり、2年次の9月に「老年看護学実習Ⅰ」、2月に「基礎看護学実習Ⅱ」を行う。看護学科では、1つでも未取得の単位があると進級できないが、3年次の9月の「成人看護学実習Ⅰ（前期科目）」の単位については、10月から始まる「領域別実習（後期科目）」を履修するために取得が必須の科目として設定されている。

一方、臨地実習は、領域別に成人看護学実習Ⅱ・成人看護学実習Ⅲ・老年看護学実習Ⅱ・母性看護学実習・小児看護学実習・精神看護学実習・在宅看護学実習の7領域（保健師課程の学生は公衆衛生看護学実習を含めた8領域）を2週間ずつ順番に履修するため、グループによって履修の順番が異なっている。以上のように看護学科の臨地実習は、4年間を通して段階的に行われていること、また領域により異なる教員が担当し、学習の目標も異なること、領域別実習の順番がグループによって異なることなどの理由から、4年間を通じての学習の積み重ねを感じる事が難しい現状にある。そのため、臨地実習に共通したルーブリックの開発において、これらの点を考慮した。

図表4-1-1 臨地実習の目標

1. 看護の対象の違いや、対象者との相互作用に気づくことで、これからの学習の動機づけを高めるとともに看護職者としての自覚を培う。
2. 医療提供の場において健康上の問題を抱えている人々と関わることで、健康上の問題や入院による影響を理解する。また、対象者の基本的ニーズを明確にして看護援助を行うことで、看護職者としての基本的な態度を身につける。
3. さまざまな成長発達過程と健康状態にある対象、およびその家族について、また看護実践が行われている多様な場の特性について、環境などを含めて多面的に理解する。一人の生活者である対象者の、看護上の問題やニーズを明確にした上で、生活の質を向上させることを目指し、個別性に応じた支援を系統的に実践する能力を養う。
4. 実践を通して、自らの看護に対する考えを明らかにし、看護についてより深く考える機会にする。
5. 看護の対象となるさまざまな人々に対して、健康の維持増進、健康問題の解決のための支援について理解する。また、健康問題を抱えながら生活する人々の、生活の質を向上させるための支援について理解する。さらに、それぞれの組織の専門職メンバーの一人として、協働的且つ主体的に機能することの重要性を理解する。
6. 実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護に対する考えを深める。



図表4-1-2 臨地実習スケジュール（看護師課程のみの場合）

### 1.3 取り組みの実際

#### 1.3.1 準備状況と開催方法

平成 25 年度に、看護栄養学部での最初のルーブリックの研修会が開催された。当初はほとんどの教員がルーブリックについての知識は全くなかった。その後、他学部との合同勉強会を行いながら、「フィジカルアセスメント」「対人関係援助論Ⅰ」「小児看護学概論（グループ発表）」など、学生の技術・態度面の評価が必要な科目でルーブリックの試作・施行が行われた。平成 26 年度には、学科として「全臨地実習に共通したルーブリック」作成の取り組みを開始した。このルーブリック開発は、高等教育研究開発センターのセンター委員と看護栄養学部教育向上委員会が中心となり企画・運営された。基本的に毎月の教授会・学科会の後の時間を用いて、ルーブリック勉強会（1 時間半～2 時間程度）と称して教員全員で取り組んだ。ほとんどの教員にとって、ルーブリックの作成は初めての経験だったため、当連携事業を推進する高等教育研究開発センター員のスーパーバイズを受けながら進めた。

図表 4-1-3 ルーブリック勉強会の各回のテーマ

	【倫理観/倫理的側面】	【看護過程】
平成 26 年度	① 全領域共通の「学生に求める力」の抽出（4 月） ② 定義・観点の整理、達成時期やレベルの検討（6 月） ③ 観点ごとに基準の作成（7 月） ④ 評価時期と方法・学生への周知方法の検討（9 月） ⑤ 3 年次の臨地実習にて試行（10 月～平成 27 年 3 月） ⑥ 振り返り（3 月）	
平成 27 年度	⑦ 評価のカリブレーションによる修正点の検討（5 月） ⑧ 観点別に主たる担当者による修正案の作成（6 月） ⑨ 修正案の決定（6 月、7 月）	レベルと観点の決定（6 月、コアメンバー） ① レベル別にグループを分け、基準を作成（6 月） ② 観点別に 1 回目に作成した基準を検討・修正（7 月） ③ 修正案の決定（9 月） ④ 2 年次の基礎看護学実習Ⅱにて試行（平成 28 年 2 月）

#### 1.3.2 ルーブリック作成・評価

##### 1.3.2.1 領域に共通して学生に求める要素の抽出

最初、各領域の担当教員が実習の実習目標・評価表を持ち寄り、「実習目標」「達成目標」「評価視点」を比較しながら、共通する内容を抽出した。検討の際にはそれぞれの領域の目標や評価視点の意味を正しく理解するために、可能な限り多くの領域の教員が含まれるようにグループ分けがなされた。また、大学の理念・カリキュラムポリシー・ディプロマ

ポリシーに照らし合わせて要素を抽出した。さらに、本学の学生の特徴、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（日本学術会議参照基準）」、「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標（厚生労働省）」「社会人基礎力（経済産業省）」なども参照した。

それぞれの実習目標の中には、看護基礎教育として求められる共通の実習目標と対象者の特徴に応じた領域別の特徴が含まれていた。そこで、話し合いにおいては、「学士課程教育・看護基礎教育として必要な要素・レベル」に絞り、要素の抽出においては、それぞれの実習科目全体の内容を網羅したものではなく、学生の行動や質の部分の評価に用いることを重視した。実習で培っていく力のうち、全領域に共通する要素は、図表4-1-4に示したように「自己洞察」「対象の理解」「アセスメント能力」「看護実践能力」「看護過程」「倫理観」の7つに整理された。当初は、これらの要素を整理して言葉を定義し、評価の観点（規準）とし、それぞれにレベルを設定したルーブリックを作成する方向で検討していた。しかしそれぞれの要素の抽象度が高いこと、それぞれの要素に複数の評価の観点が含まれることが推察されたため、実習で特に学ぶべき専門職基礎教育において重要であり、かつ領域の実習目標に共通して含まれていた『倫理観』に焦点をあてて作成することとした。

求める力	言葉の定義	それぞれのレベル			
自己洞察					
対象の理解					
アセスメント能力					
看護実践能力					
看護過程					
他職種連携					
<b>倫理観</b>					

図表4-1-4 初回の話し合いで出された共通要素

### 1.3.2.2 要素の定義・観点・達成時期（レベル）の検討

『倫理観』の定義・および要素の検討においては、それぞれの領域が目標あるいは評価視点としている内容に加え、グループメンバーの教員が、学生指導の中で重要視していることを抽出して整理をした。倫理観の定義では、[共生の思想][人権の擁護][善悪の規準]

[根拠を持った判断] [専門職者としてのふるまい] [最善] など、グループにより定義に含めた表現に違いがみられた。また、それぞれの実習で重要と考えている《レベルの特徴》に含まれる内容に違いがあることが再確認された。そこで、全体会議の終了後、各グループで出された倫理観の定義とそれぞれのレベルに含まれる内容をひとつにまとめ、写真1のように壁新聞の形で廊下に貼り出した。これには、教員間で日常的に話し合いができる状況を作り、学生とルーブリックの開発過程を共有する狙いがあった。

その後コアメンバーで検討し、[最善] [礼節] [自律性] [学ぶ姿勢] の4つの観点に分類し、評価の観点（規準）とすることを提案した。

レベル数・時期は、①入学時、②基礎看護学実習Ⅰ、③基礎看護学実習Ⅱ、④領域別実習前半、⑤領域別実習終了時に分けることとした。以上のような評価の観点（規準）とレベルが設定され、それぞれの「記述」が、FD研修会で検討され、ルーブリックが試作された。1年目の試行後の振り返り、平成27年度の修正案の検討の中で、臨地実習では学生の認識のみでなく、行動面も含める必要があることが確認され、『倫理観』は『倫理的側面』と表記を修正された。さらに、[礼節] を観点から外し [基本的態度] として全体の基盤に位置付けるなどの修正を行った。さらにレベルの時期も、⑤領域別実習終了時を総合実習終了時に変更した。

平成26年度、27年度の『倫理的側面』のルーブリックの作成に加えて、平成27年度には『看護過程』のルーブリックの作成が行われた。『看護過程』は、看護学において、「独自の知識体系に基づき、ヘルスケア、看護ケアを必要としている対象者に的確にこたえるために、どのような計画・介入援助が望ましいかを考え、系統的・組織的に行う活動のこと」であり、[看護アセスメント][看護診断][看護計画][看護介入・実施][看護評価]の5段階であることは周知の事実である。そのため、コアメンバーで作成した4つの観点[情報収集・アセスメント（対象理解）][計画立案][実施][評価（振り返り）]、レベルの時期（①1年後期、②2年後期、③成人看護学実習Ⅰ終了時、④領域別実習終了時、⑤卒業時）は、教員全員の合意を得やすかった。

図表 4-1-5 臨地実習ルーブリック「倫理」の到達目標のプロセス表 平成 26 年試用版

観点	定義	段 階				
		5	4	3	2	1
最善	対象者の価値観や信念をふまえ、専門職者としての判断に基づいて対象者にとって望ましいと思われる策を考える力	対象者の意思を明確にすると共に、対象者の最善に関する家族および多職種チームの見解を合わせて考えることができる	対象者の尊厳を尊重することの重要性を理解すると共に、様々な立場から生じる倫理的ジレンマに気づくことができる	対象者および関係する人々の多様な状況・価値観に気づき、受け入れることができる	対象者および関係する人々に関心を持ち、それぞれの様々な思いを知ることができる	人(人間)に関心を持ち、話を聴くことができる
自律性	他者との関わりを通じて、自分と他者との価値観の相違を知り、自分の行動に責任が伴うことを自覚し、看護学生として自分の規律に従って行動する	様々な実習を重ねることで、自分の行動に責任が伴うことを自覚し、相手を尊重しながら、自分の価値基準に従って、自分の行動をコントロールする	実習における様々な立場の人とのかかわりを通じて自己洞察し、看護学生としての自分の価値基準をもつと共に、自分の行動に責任が伴うことに気づく	患者・家族との関わりを通じて、自分と他者との違いが分かり、看護学生としての自分の価値観に気づく	日常生活において、自分と他者との価値観の違いに気づき、自分の考え方の傾向を知る	自分の善悪の基準を持ち、自分の存在の大切さについて考える
礼節	実習で出会う人々に対して、不快感を与えず敬意をもって行動することができる。 ・身だしなみ ・挨拶・言葉づかい ・態度・守秘義務	・実習の場・内容に応じた服装を整えることができる  ・自分の行動を振り返り、行動を修正することができる ・周囲の状況を速やかに把握して行動することができる	・正しく敬語を使うことができる ・(他者の反応をキャッチして)自分の行動を振り返ることができる ・周囲の状況を気遣うことができる	・自ら実習にふさわしい身だしなみができる ・自主的に場に応じた挨拶ができる ・個人情報を漏えいしない ・意識して敬語を使うことができる ・他者の反応をキャッチすることができる ・周囲の状況に気付くことができる	・指導に従って実習にふさわしい身だしなみができる ・病棟で出会う人・対象者へ挨拶ができる ・守秘すべき情報に気付くことができる	・清潔な身だしなみを整えることができる ・学内・学外者へ挨拶ができる
学ぶ姿勢	将来、看護職になる者として責任を果たすために、学習を継続する意思を持ち、そのための具体的な方法がわかる能力	医療を取り巻く社会情勢に関心を持ち、看護職としての責任を果たすために、学習者として必要な学習手段を講じ継続することができる	看護職としての責任を果たすために、学習者として学習内容を確実なものにするための手段を講じることができる	看護職としての責任を果たすために、実習中に生じた疑問の解決に向けて努力することができる	看護職としての責任の重さと学習の必要性に気づくことができる	看護職になるための学習の動機づけを持ち、学習習慣が身についている

### 1.3.2.3 ルーブリックの作成過程

『倫理観』の作成過程では、[最善][礼節][自律性][学ぶ姿勢]の中で教員が興味をもっていたり大切にしたりしている観点について検討できるように、希望制でグループを作った。グループで話し合ったものを全体に発表・質疑応答した。観点の表現、観点間の重なり、同義の表現の統一などが検討課題として挙げられた。全体会議における質疑応答を受け、再度担当グループで検討・修正し、最終表現を廊下に張り出して共有、意見交換をした。さらに9月の全体会議で検討し、試用版のルーブリックを完成させ、3年次の領域実習にて施行した。

1年目の試行後のふりかえり、平成27年度の修正案の検討の中で、表現や解釈が困難だった基準や観点間の重複を修正すると共に、教員と学生の共通理解を促す補助として「学生に期待する倫理と臨地実習における倫理的側面の定義」「看護学実習における倫理的側面の構造」に関する文書を作成した。

平成27年度に開始した『看護過程』の作成では、観点別ではなくレベル別にグループ分けをして、各グループが、当該レベルに対応する『看護過程』ルーブリックの評価の観点(「規準」)のすべての「記述」を作成することにした。何故なら、看護過程は、情報収集・計画立案・実施・評価がPDCAサイクルになっている一連の流れであり、学生の思考過程として自然であると考えたためである。また、レベル①②は基礎看護学と老年看護学の教員が、⑤は学科全体の教育を管理している立場の教授陣が含まれるようにグループを分け

て作業をした。レベル別の作成により、ルーブリックは、異なる観点間で一貫性のあるレベルが設定されたが、グループ間でのレベル差に一貫性がないものを含んでいた。具体的には、異なるグループで同じレベルが設定されたり、隣り合わせのレベル差が非常に大きかったりした。そこで観点別に修正後、「各レベルに該当する臨地実習（1年次は学内演習）で求める内容」「レベル間の妥当性」「それぞれのレベルにおける看護過程としての整合性」について検討し、試行版を作成した。

臨地実習ルーブリック(実習を通して身につける力)「倫理的側面」		学籍番号		氏名									
<p>【使用方法】</p> <p>1. 下記の実習終了後、それぞれの観点について振り返り、自己の達成レベルを数字で書き入れる。</p> <p>2. 次に自己評価した達成レベルの理由について記述する。</p> <p>3. 指導教員に提出する。</p> <p style="text-align: right;">平成27年度</p>													
		5	4	3	2	1	基礎 I	老年 I	基礎 II	領域 (3領域終了)	領域 (全て終了)	総合	
観点	定義	レベル						レベル( )	レベル( )				
最善	専門職者として対象者にとつての善について考えることができる	対象者および関係する人々の様々な価値観を尊重しながら、専門職者として対象者にとつての最善について考えることができる	対象者および関係する人々の状況や価値観が、守るべきこととしてどのように関連しているかを整理することができる	対象者および関係する人々の思いの強弱にそれぞれに気づくことができる	対象者および関係する人々の思いの強弱にそれぞれに気づくことができる	人(人間)に関心を寄せることができる							
自律性	自分の行動に責任が伴うことを自覚し、賢い看護を提供するために、自分の行動を調整することができる	看護学生としての自己の責任を認識し、状況に合わせて自分の行動を調整することができる	看護学生としての高い看護を提供するために、自分の行動に責任が伴うことに気づく	自らの行動を振り返り、状況に応じて適切な判断ができる	他者に則った行動の適切性を考えることができる	看護学生として、他者に則った行動をすることができ							
学び続ける力	看護職者としての責任を果たすために、また、対象者にとつての最善を考へるための根拠を持つために学び続けることができる	生涯や技術の進歩、それらと社会との関係に関心をもち、看護職者としての責任を果たすために、専門知識・技術の向上に努めることができる	学習内容を確実に身に付けるために、自らにむかっただけでなく、積極的に学ぶことができる	実習で生じた疑問を解決するために学習することができる	看護職者としての責任の必要性を学ぶことができる	看護職者になるためのための動機づけや学習習慣が身についている							
基本的態度	<p>【倫理管理】</p> <p><input type="checkbox"/> 本質管理(要約、要旨、確認など)ができる</p> <p><input type="checkbox"/> 心の健康を築くことができる</p> <p><input type="checkbox"/> 実習に臨んだ達成感がどう判断できる</p> <p>【身だしなみ】</p> <p><input type="checkbox"/> 実習の場、内容に臨んだ身だしなみを整えることができる</p> <p>【挨拶・言葉遣い】</p> <p><input type="checkbox"/> 声かけができる</p> <p><input type="checkbox"/> 対象に合わせた言葉遣い(敬語など)を用いることができる</p> <p>【情報管理】</p> <p><input type="checkbox"/> 取りえた情報の中で、要約すべき情報がある</p> <p><input type="checkbox"/> 取りえた情報の内容に合わせて、「課題」「講師」「指導」を適切に判断し報告できる</p> <p><input type="checkbox"/> 本人が担当しないよう、情報管理(記録の記載、公共の場での発言、電子媒体での送信、など)ができる</p>												
							記入日 月 日						
							確認印	確認印	確認印	確認印	確認印	確認印	

図表 4-1-6 臨地実習ルーブリック「倫理的側面」 平成 27 年度版

臨地実習ルーブリック(実習を通して身につける力)「看護過程」

学籍番号 氏名

【使用方法】

1. 下記の実習終了後、それぞれの観点について振り返り、自己の達成レベルを数字で記入される。
2. 次に自己評価した達成レベルの理由について記述する。
3. 指導教員(1年次終了時は、基礎看護の教員)に提出する。

観点	定義	レベル				
		5	4	3	2	1
情報収集・アセスメント	対象者に適した看護計画を立案するために、情報と既存の知識を統合させて判断する	不足の情報や資源を明らかにし、優先的に活用し、包括的に整理・分析できる	心理・社会面も含め、情報を整理・分析し、優先順位を考えた看護問題を挙げることができる	健康障害が日常生活に及ぼす影響を整理分析し、主要な看護問題を挙げることができる	必要な情報を収集し、個別性のある日常生活行動援助の根拠を考へることができる	援助に必要な情報を収集していくためには基礎的知識が基礎となることに気づくことができる
計画立案	看護問題に即した目標を設定し、具体的な計画を立案する	あらゆる資源を活用し、対象者に合った個別性のある目標を設定でき、具体的な看護計画を立案できる	個別性を考慮して目標を設定し、具体的な看護計画を立案し提示できる	看護問題に応じた目標を設定し、看護計画を立案できる	対象者に合った日常生活行動援助の目的がわかり、看護計画が立案できる	基本的な日常生活援助の原則を踏まえて、手順が考えられる
実施	情報収集・アセスメントに基づき、対象者の状況に合わせて安全・安楽に実践する	対象者の状態や、周囲環境の状況を判断し、優先順位を考慮して実践できる	立案した看護計画に基づき、対象者の状態と状況に合わせて必要に応じて修正し、実践できる	立案した看護計画に基づき、対象者の安全・安楽に配慮して実践できる	計画した特定の看護援助について、対象者の状態に意図を向けながら日常生活行動援助ができる	原理・原則に基づき、手順通りに看護技術を実施できる
評価	客観的に看護過程を見直し、必要時修正する	情報収集から実施までの全過程を振り返り、適切性を評価し必要時修正できる	看護実践を振り返り、対象者の反応を基に看護計画の適切性を評価し、必要時修正できる	看護実践を振り返り、対象者の反応を基に看護計画の適切性を評価できる	行った日常生活行動援助について、対象者の反応に基づき、根拠や方法の適切性に焦点をあてて評価できる	対象者に提供した看護技術が原理原則に基づいて実施できたか、評価できる

記入日	1年次終了 月 日	基礎看護II実習 月 日	成人看護I実習 月 日	領域別実習終了 月 日	総合実習 月 日
レベル	レベル	レベル	レベル	レベル	レベル
レベル	レベル	レベル	レベル	レベル	レベル
レベル	レベル	レベル	レベル	レベル	レベル
レベル	レベル	レベル	レベル	レベル	レベル

図表4-1-7 臨地実習ルーブリック「看護過程」 平成27年度版

1.3.2.4 学生への周知方法・評価の時期と方法

学生に周知するために初年度は【ルーブリック導入の目的】【ルーブリックとは】【ルーブリック作成の経緯】【ルーブリック使用方法】に関する説明文書を作成した。2年目以降は、学士力ルーブリックやコモンルーブリックの使用が始まったため、改めてルーブリックについての細かい説明はやめ、【ルーブリック導入の目的】【ルーブリック使用方法】さらには【倫理的側面】に関する文書を実習の全体オリエンテーションで配布した。

今回作成したルーブリックは、科目の成績評価などの点数に関係するものではなく、あくまでも学生自身が卒業までに求められる到達目標について自分の達成レベルをチェックする間接評価として使用した。そのため、教員が本ルーブリックを使用して成績評価することはなく、学生が自己評価し、教員に提出、教員は評価してあることを確認するのみとした。これらのルーブリックの活用法についても、ルーブリック研修会で検討した。活用

法の検討は、ルーブリックを活用する目的とその方法に一貫性をもたせるために重要なプロセスであるとする。

また、ルーブリックは学生と教員のコミュニケーションとして有用といわれているが、面接の実施については教員に一任した。

### 1.3.2.5 ルーブリック作成における工夫（図表4-1-8、9）

本取組を学科全体としてスムーズに進行するために、「学科全体での勉強会」の前後で「コアメンバー（高等教育センター委員、教育向上委員会担当者、学科長、学部長）」での会議をもち、事前準備と勉強会での成果の整理を行った。全体勉強会を教授会・学科会が開催される日に設定したために、教員の参加率は9割以上であった。

また、勉強会は月に1回の頻度であり、10月～2月は教員のほとんどが臨地実習指導で学内にいないため、短い期間で成果を出す必要があった。そのため、写真1、2のように壁新聞の形で教員と学生がよく通る廊下に張り出し、付箋と筆記用具を用意して意見を記述しやすいようにした。度々、複数の教員で内容について話し合う姿がみられた。さらに教員が学生に用語の理解などについて確認することもあった。ルーブリックを使用するのは学生であるので、作成過程に学生が参加することは学生の理解できるルーブリックにつながると思われる。

さらに、勉強会での討議やスーパーバイズ、さらにはコアメンバーでの会議の内容を詳細な文書にし、終了後早い時期に学内メーリングリストを用いて伝達した。タイムリーな情報共有は、ルーブリック作成への教員の興味関心を持続させる効果があった。さらに、教員全員がみられる共有フォルダに全ての文書・写真を保存し自由に閲覧できるようにした。



図表4-1-8、9 壁新聞：『倫理観』に関する話し合いの結果

## 1.4 教学マネジメントからみた取り組みの効果

### 1.4.1 学生にとっての効果

看護基礎教育の中心である臨地実習の共通ルーブリックが示されたことで、学生は学士課程の4年間で専門職として到達すべきゴールを理解しやすくなったと考える。

これまではシラバス等において科目ごとの実習目標が示されていたが、8つの領域で構成される臨地実習というプログラムにおいて、系統的に積み上げていく学びを通して身につけるべき能力を意識しにくかった可能性がある。この点で、共通ルーブリックを活用することで、学生が、隣地実習というプログラムにおける到達目標を意識し、実習領域を重ねるごとに学びをふりかえり、主体的な学びを積み上げ、習得すべき能力の獲得につながる効果が期待できる。

### 1.4.2 教員にとっての効果

教員個人としては、全ての実習に共通したルーブリックを作成する過程において、お互いの領域で求めている能力を共通認識し、到達目標のズレを修正することができた。また、「ディプロマポリシー」や「学士課程においてコアとなる看護実践能力」を基盤に作成したことで、看護専門職になるために必要な能力を改めて整理することが出来、学位プログラムで育成する能力の明確化につながった。さらに教員は、ルーブリック作成に携わることを通して、学生が大学4年間を通して、看護学全領域を経て学んでいくプロセスを追体験し、理解することができた。この体験は、教員の実習における適切な学生指導につながると考える。

また、担当外の実習における目的・目標を知ることは、今後の科目間連携にもつながる活動になり、プログラム・アセスメントやそれによる学習成果を高めるためのカリキュラムの開発に結び付くと考える。さらに実習に関わる教員全員で話し合いを行うことで、お互いの実習目的や内容を確認することが出来、効率的かつ効果的な臨地実習プログラムの実現を可能にする。また学科全体の教員によるこのような取り組みは、教員同士のコミュニケーションを促進する効果があった。

## 1.5 おわりに

今回「大学間連携共同教育推進事業」への参画をきっかけに、学科全体で実習に関するルーブリックを作成した。多くの教員がゼロからのスタートであった中、大学の高等教育研究センター委員の協力の上に行ったことにより、ルーブリックという新しい評価方法に関するスーパーバイズを受けることができ、取り組みが進みやすかった。また、看護基礎教育において重要な位置をしめる臨地実習に共通したルーブリックを考えることは、学科のディプロマポリシーやカリキュラムを考える機会になった。現在も継続して使用しているが、学科を越えての使用であるため、実施責任者、有効かつ継続できる使用方法、共通ルーブリックと科目評価との関連性の検討など、課題は多く残っている。今後も学科全体

での取り組みを継続し、学生の学びをサポートできるルーブリックとして精錬していく。



## 2. 卒業論文ルーブリックの開発

関西国際大学 高等教育研究開発センター 教育開発部門長/教育学部  
吉田 武大

### 2.1 はじめに

2015年に本取組「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」の平成24～26年度事業報告書が刊行されて以降、ルーブリックについては、当時の卒業論文ルーブリックを大幅に修正して新たな卒業論文ルーブリックを開発することが大きな課題とされた。

そこで本稿では、卒業論文ルーブリックを開発することとなった背景、卒業論文ルーブリックの開発プロセスと今後の開発プロセスを報告していくことにする。

### 2.2 開発の背景

上記のように、2015年以前にも関西国際大学（以下、本学）に卒業論文のルーブリック自体は存在しており、各学科では活用もされていた。そのような中、2015年3月に文部科学省通知「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の公付について」が出されたことを受けて、本学では3つの方針を策定した。卒業論文ルーブリックと関わって注目すべきは、卒業認定・学位授与の方針（DP）の「(6)専門的知識・技能の活用力」という項目である。ここでは、次のような内容が規定されている。

自ら学ぶ学位プログラムの基礎となる専門的知識・技能を修得し、実際の場面で、その時・その場の状況に応じて、再構成し活用することができます。
--

このように、専門的知識・技能の活用力を身につけることが公式に定められたのである。とはいえ、当時の卒業論文ルーブリックは、このような力を評価するという点で必ずしも十分ではなかった。そこで、卒業認定・学位授与の方針に対応した新たな卒業論文ルーブリックを開発することとなったのである。

### 2.3 開発のプロセス

卒業論文ルーブリックを修正して新たに開発するにあたって、当時の卒業論文ルーブリックの問題点を検証するために、本学に設置されていた教育開発委員会の委員であった教員に、当時の卒業論文ルーブリックを用いて各学科の卒業論文を実際に評価してもらい、その問題点等に関する協議を2日間にわたって実施した。その結果、次のような意見が出された。

- (1)調査型、文献研究型といった、研究方法別のルーブリックを作る必要があるのではないか。
- (2)学科専攻によって、ルーブリックのミニマムスタンダードが異なってくるのではないか。
- (3)卒業論文ルーブリックのレベルごとに指導マニュアルがあると、教員にとって指導と評価の方向性が分かりやすくなるのではないか。

これらの指摘を受けて、まずは、当時の卒業論文ルーブリックを、調査型と文献研究型という 2 つのタイプに分けて作成を試みた。しかし、研究方法別の卒業論文ルーブリックを作成することが、必ずしも卒業認定・学位授与の方針の「(6)専門的知識・技能の活用力」に対応することにはならないという意見が出されたことで、卒業論文ルーブリックをどのように修正するかについて再度検討することになったのである。その際、卒業認定・学位授与の方針は学科の教育理念や目標等に応じて学科別に作成されていることから、卒業論文ルーブリックについても、学科ごとに作成することとし、当面は筆者の所属学科である教育福祉学科のルーブリックを先行的に開発することになった。

当初、教育福祉学科の卒業論文ルーブリックの評価の観点については、次の 4 点を設定した。

1. 複数の研究方法を活用し、教育・社会事象を理解し、説明することができる。
2. 教育・社会事象に関して、教育学や社会福祉学の体系的な知識を使って理論的に説明し、実践を改善する方策を提案することができる。
3. 教育や福祉の場面において必要となるコミュニケーション力を獲得し、円滑な人間関係を構築することができる。
4. 知り得えた知識、経験を総合化し、実際の生活で活用することができる。

このうち、3. については、そもそも卒業論文で評価可能なのかという意見が出されたことを受けて、削除した。また、4. については、「実際の生活」という表現は飛躍し過ぎているのではないかとの意見を受けて、代わりに「教育実習やインターンシップ」という表現に改めた。

残りの 1. と 2. は卒業論文で評価可能ではあるが、4. をそもそも卒業論文で評価することが可能なのかとの意見が別途なされたことを考慮して、評価の観点を次のように全面的に改めることにした。

1. 問題の発見と仮説の設定
2. 研究方法の活用
3. 分析
4. 考察・結論

その後、評価の観点については若干の微修正を繰り返し行ったものの、2. の研究方法の活用が卒業認定・学位授与の方針の「(6)専門的知識・技能の活用力」に対応していないのではないかと指摘が出されたことを受けて、さらに以下のように評価の観点を修正した。

1. 研究課題の設定
2. 科学的研究方法の選択と分析
3. 関連研究の活用
4. 論証と帰結

なお、フォントサイズやページ番号の表示、句読点といった書式、参考文献数、分量、そして誤字脱字のなさや文体の統一といった正確な表記などのような形式面については、別途チェックリストを作成して、評価を行うこととした。

#### 2.4 今後の開発プロセス

修正版となる卒業論文ルーブリックをめぐっては、今後、各レベルの表現をチェックした上で、教育福祉学科の学生の複数の卒業論文を用いて複数の教員で評価を行いカリブレーションを通して、評価上の問題点がないかを検討することになっている。

こうして教育福祉学科の卒業論文ルーブリックを完成させた後に、このルーブリックをもとにして各学科のカスタマイズ版を作成する予定である。その後、このルーブリックを用いて学生の最終的な成果物である卒業論文を評価して、学生個人レベル、学科レベル、大学レベルのアセスメントツールとして活用していくことを予定している。

#### 2.5 おわりに

これまで、卒業論文ルーブリックの開発の背景とプロセスを明らかにしてきた。開発には相当の時間をかけ、さまざまな意見を考慮しながら修正を加えてきているものの、完成後に修正の必要がなくなるわけではない。多くの卒業論文を評価していく作業を通じて、新たな修正点が浮上する可能性がある。このように実際の活用を経ることによって、卒業論文ルーブリックの完成度をさらに高めていく必要があると考えている。



### 3. 論理的思考テストの開発と利用

関西国際大学 人間科学部  
上村 和美

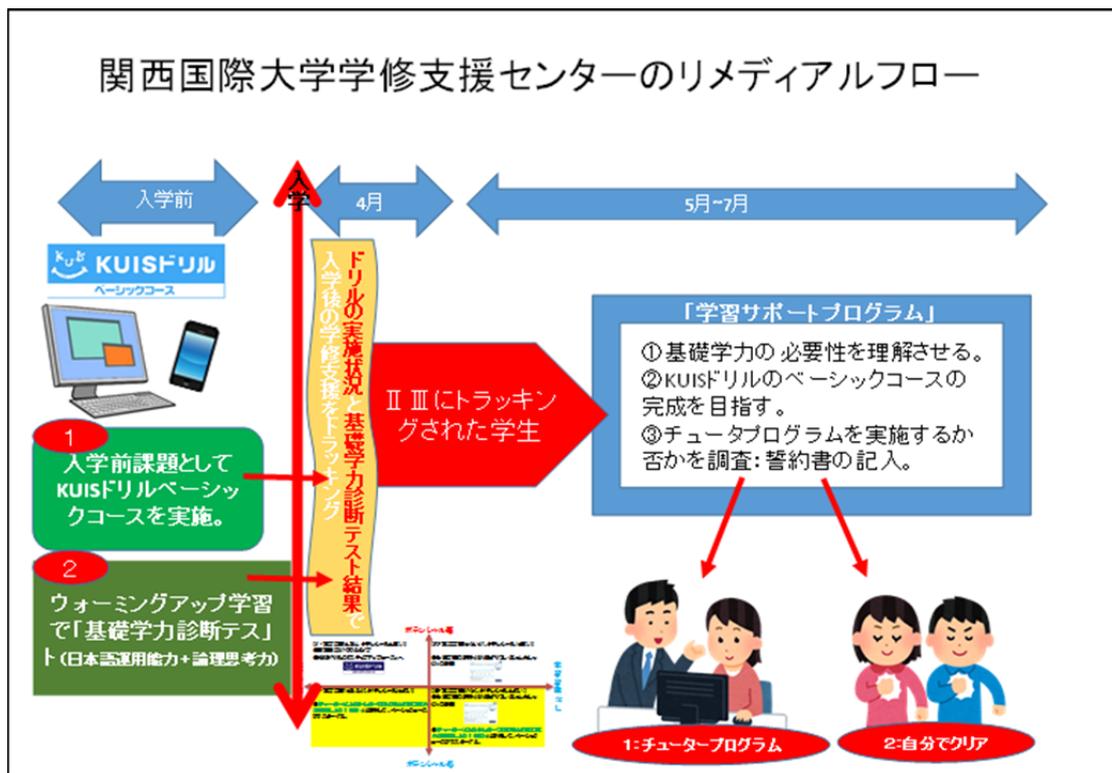
#### 3.1 はじめに

関西国際大学・学修支援センター（2015年に「学習支援センター」より名称改称）では、本連携取組がスタートする以前の2009年度入学生から、入学前または入学時に「基礎学力診断テスト」を実施している。「基礎学力診断テスト」とは、「日本語運用能力テスト」（25問・10分）と「論理思考力テスト」（25問・15分・マークシート方式）の簡易診断テストであり、当初は「日本語運用能力テスト」のみでスタートした。作問も、当時の学修支援センター委員の2名（うち1名は筆者である）で行った。その後、内容の精緻化を目指すため、平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の事業により、3パターンを開発した。この3パターンは、現在も活用中である。

入学前および入学時に実施した「基礎学力診断テスト」の結果は、学修支援センターのリメディアル教育指導に役立てるだけでなく、新入生のアドバイザー（担任）へも情報提供している。大学入学時には、高校までの成績情報があるものの、そこには高校による「差」があるため、履修指導等に直接活かすことができないのが現状である。そこで、アドバイザーは、「基礎学力診断テスト」の結果を新入生の履修指導や面談を行う際に、参考資料として活用しているのである。たとえば、基礎学力のスコアが低い学生の場合、入学時の履修登録単位の上限である22単位までを履修登録させてしまうと、春学期末の段階で全ての科目のテストやレポートに対応できない可能性がある。春学期は大学生活への適応を中心に、必修科目を中心とした履修プランを立てることで、ゆるやかに大学生活へ移行できるようになるのである。

次に示すのが、学修支援センターが行っているリメディアル教育のフローである。

学修支援センターでは、「基礎学力診断テスト」とeラーニングシステム「KUISドリル」を併用し、「基礎学力診断テスト」でポテンシャルを計測し、eラーニングの学習時間により学習習慣を計測し、その2つの要素で4象限を作成した。つまり、ポテンシャルも低く、学習習慣もない学生に対して、リメディアル教育が必要だと考えたのである。その指標の一つとなったのが、今回開発した「論理的思考力テスト」であった。



図表 4-3-1 関西国際大学学修支援センターリメディアルフロー図

### 3.2 分科会の実施

各大学の分科会メンバーは、次表のとおりである。

図表 4-3-2 分科会「論理的思考力テスト」メンバー

関西国際大学	藤木清、上村和美
淑徳大学	芹澤高斉、駒崎久明
北陸学院大学	富岡和久、池村努
くらしき作陽大学	芝崎良典、新名俊樹、松本隆行

(敬称略：9名)

メンバーは、必ずしも本事業の中心メンバーではなく、テスト開発のアイデアを出せる教員ということで、各大学において選抜した。

そして、パイロット版の開発までには、全2回の分科会を開催した。

### 【第1回】

日 時：2015年3月5日（木）13：00～14：30

方 式：遠隔会議システムによる

### 【第2回】

日 時：2015年8月24日（月）13：00～15：00

方 式：遠隔会議システムによる

分科会開催にあたっては、対面で行うことがスケジュール的に難しかったため、いずれも遠隔会議システムで4大学を結んで実施した。当初は、意思疎通がうまく図れるか憂慮していたが、この分科会は多人数ではなく、各大学が2～4名程度の人数であり、作問者でもあったため、遠隔システムでも十分に意思疎通を図ることができた。少人数による遠隔システムの活用が、密度の濃いミーティングや会議につながるということが実証できたケースとも言えるであろう。

### 3.3 開発コンセプト

4大学の代表者による分科会においてテスト開発を行うにあたっては、まず“論理的思考力とは何か”という議論からスタートさせることにした。議論の最初に原案として提示したのは、「“論理的”の内容を“数理的”内容を中心としてとらえる」であった。それは、「日本語運用能力」＝言語と対になるアセスメントとして活用することを目的としているからである。これをもとに分科会で議論した結果、数理的内容を中心とすることで方向づけられた。

次に、実施時間であるが、これもできるだけ短時間で実施することが、現実に即しているということで、「日本語運用能力テスト」にしたがって、10分を目安に作問することに決まった（パイロット調査の結果により、最終的には15分となった）。

2回の分科会を経て、次のような「作成要領」を完成させ、各大学でパイロット版（全部で4パターン）を試作することになった。

### 論理思考力テスト・作成要領

作問にあたっては、第 2 回研究会での検討結果を受け、以下の内容・問題数にしたがって、Word の[ウォーミングアップ論理思考テスト\_A\_三木]ファイルで整形して提出する。

#### 図 1 配点 1\*5=5 点

- ・グラフの読みとり問題
- ・○×で回答する正誤形式
- ・問題数は 5 問

※n の人数が同じになるような比較は避ける。理由:見たままで答えられるため、グラフが読みとれているかどうかわからないため。

#### 図 2 配点 1\*5=5 点

- ・命題の問題
- ・各問で 5 つ程度の選択肢を作る
- ・問題数は 5 問

※先入観を排除して考えられるものがよい。例:その動物がライオンであれば、主食は肉である、など。

#### 図 3 配点 1\*5=5 点

- ・計算式の問題
- ・ただし、計算式の優先順位、分数、文章から計算式を作成する、四則計算の記号を答える問題を入れる。
- ・問題数は 5 問

#### 図 4 配点 1\*10=10 点

- ・食塩水に関する問題、納期を答える問題、距離算の問題、時速の問題など
- ・空欄を補充する形式
- ・問題数は 10 問

合計で 25 点満点の問題となる。

図表 4-3-3 「論理的思考力テスト」作成要領

パイロット版は、関西国際大学において実施し、その結果を精査したうえで、仕上げていった。

解答方式は、「日本語運用能力テスト」では、漢字を問う問題もあるため、全問を記述式としているが、「論理的思考力テスト」については、採点の効率化を図るため、試験的にマークシート方式を採用した（パイロット版の実施は 2015 年 1 月）。

### 3.4 テストの概要

完成したテストの概要は、次に示すとおりである。

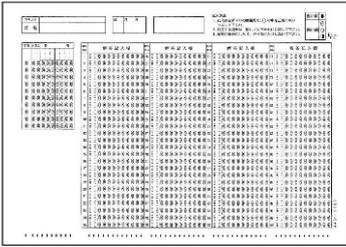
00101A

ウォーミングアップ学習

**論理的思考力テスト**

- 問題は裏面にあります。
- 「はじめ」の合図があるまで、裏面の問題を見てはいけません。
- 「解答」は全て、別紙のマークシート用紙に記入してください。
- 試験時間は15分間です。
- 終了後は、問題用紙とマークシート用紙の両方を回収します。

●マークシート用紙の記入方法



学部	学科	氏名	
----	----	----	--

図表4-3-4 「論理的思考力テスト」表紙

完成した「論理思考力テスト」の試行結果は、以下の通りであった。

論理的思考テスト2015年実施											
1年次施行版4月						2年次A2パターン9月					
	問1	問2	問3	問4	計		問1	問2	問3	問4	計
平均	5.881	0.100	2.858	3.642	12.481	平均	3.607	1.938	2.231	0.308	6.398
標準偏差	1.321	0.626	1.251	1.936	3.135	標準偏差	0.876	1.336	1.130	0.854	3.906
0	0.000	0.975	0.025	0.086		0	0.006	0.186	0.098	0.831	
1	0.004		0.109	0.088		1	0.015	0.195	0.118	0.101	
2	0.006		0.259	0.142		2	0.086	0.260	0.370	0.033	
3	0.029		0.322	0.107		3	0.251	0.231	0.290	0.012	
4	0.092	0.025	0.159	0.100		4	0.544	0.107	0.118	0.012	
5	0.220		0.126	0.345		5	0.098	0.021	0.006	0.012	
6	0.349			0.100		6				0.000	
7	0.201			0.031		7				0.000	
8	0.077					8				0.000	
9	0.021					9				0.000	
10						10				0.000	
3年次Cパターン9月						4年次Bパターン9月					
	問1	問2	問3	問4	計		問1	問2	問3	問4	計
平均	1.908	0.681	1.563	1.078	3.818	平均	2.528	1.351	2.753	0.338	4.879
標準偏差	1.552	0.726	1.201	1.651	3.394	標準偏差	1.130	1.056	0.935	1.091	3.762
0	0.179	0.462	0.216	0.630		0	0.052	0.225	0.004	0.840	
1	0.328	0.406	0.294	0.028		1	0.091	0.377	0.004	0.091	
2	0.190	0.120	0.283	0.165		2	0.346	0.260	0.489	0.026	
3	0.106	0.011	0.137	0.070		3	0.351	0.100	0.299	0.022	
4	0.101	0.000	0.059	0.059		4	0.108	0.039	0.143	0.013	
5	0.095	0.000	0.011	0.022		5	0.052	0.000	0.061	0.000	
6				0.017		6				0.000	
7				0.006		7				0.000	
8				0.003		8				0.000	
9				0.000		9				0.009	
10				0.000		10				0.000	

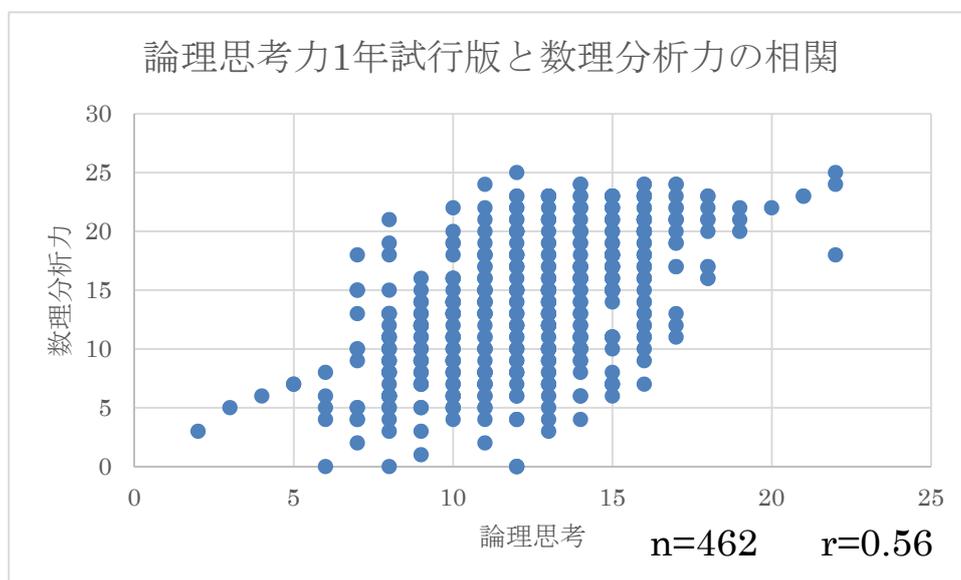
図表4-3-5 「論理的思考力テスト」試行結果

なお、完成した実際の問題については、現在、実際に使用している関係で掲載できないことを予めお断りしておく。

### 3.5 関西国際大学 IR への活用事例

分科会で開発した「論理思考力テスト」を含む「基礎学力診断テスト」の結果は、学修支援センターで活用するだけでなく、評価センターの IR 部門にもデータ提供を行い、学内のデータの一元化を図っている。

たとえば、データの一元化を行うことで、既の実施している大学入試センターの「数理分析力テスト」との相関を見ることもできるようになっている。



図表 4-3-6 「論理的思考力テスト」と「数理分析力テスト」との相関関係

### 3.6 今後の展望

2016年1月7日(木)14:00~16:00に、本事業のステークホルダー・大学入試センターから、開発中の「論理思考力テスト」問題と実施結果の分析から、以下のようなコメントをいただいた。

- 問題数の多さを再検討する。→最後まで解けるように。
- 読む分量とレイアウトを変更して、考えることに集中させる。→負担感が少ないように、見やすく解きやすいようにする。
- グラフの読みとりについては、グラフの要素のボリュームを下げてもっとシンプルにする。
- 問いの文章自体も、シンプルに短くする。

- 問2の命題の問題が、「論思考力テスト」としてふさわしいのではないか。
- 4パターンの難易度が明らかに違う。難易度をそろえるならば、大問単位で行う。テストの目的を明確にするべき。→入学時なのか、上級生の経年変化なのか。
- 計算問題自体は論理性を問う問題ではないが、計算ができないと論理性は発揮できない。したがって、計算問題があってもよい。
- 正答率50%を目指すのが、妥当。その点では、試行版が最も理想に近い数値である。
- パイロットをくりかえして、ブラッシュアップすることが必要。

今後は、これらのコメントを参考に、さらに問題を精緻化していく必要がある。